

## William Faulkner の詩 (2)

### I. 『大理石の牧神』全訳

### II. 『緑の大枝』全訳

森 田 孟

### I. 『大理石の牧神』 *The Marble Faun* (1924)

#### 序

ポプラの木々が左右に揺れている  
この灰色の古い庭を通り過ぎながら  
細っそりした乙女たちが領き合っているように  
丈高く房なすタチアオイや  
ムラサキシオンやフロックスの  
花壇の上で囁き交わしながら；  
ヒナギクの夢みるような黄金に心奪われて  
それはやたらに振り撒かれた富なのだが、  
しなやかに素早く宙に舞った踊り子たちのような  
細っそりした優美な足は話題にされぬままに。  
ここの薔薇の蠟燭状の炎が  
この静かな空気の中で黄金に流れ跡をつけ、  
雲は西方の空を滑り下り  
この陽光降りそそぐ幻想を見つめようとする、  
一方 ポプラの木々のきらきら輝く冠毛は  
その銀色に光る乳房と軽やかに触れ合い  
やがてその乙女の列を揺さぶることになる筈の  
冬の雪のことなど 夢みたりはしない。

日々は金白色に夢みながら過ぎてゆく  
泉の銀の光の辺りを  
光はそよ風の中で上昇し震える  
木々と同じく優雅に細っそりとして；  
それから そのきらめかされている髪を掃すり落とす  
静かな水溜りに映っている美しい  
斑まだらの顔の上に。

何故 私は悲しいのだろうか。私が？

何故 私は満足ではないのか。空は  
私を暖めてくれるのに 私には破れないのだ  
私の大理石の束縛を。あの素早い蛇は  
自由に往き来するのに、私は  
囚われ人として夢み焦がれるのだ  
知っているのに知ることのできない物に、  
大空と大地の上下に狭まれて。  
広がる大地は私の足元に呼び掛ける  
食べられる果実で輝いている果樹園のことを、  
両手の丘々と流れのことを；  
月光に白く晒された砂の上の夜の眠りのことを：  
全世界が息づいて 呼び掛けているのだ  
大理石に縛られていなければならない私に。

\*

もし自由だったら 私は行くだろう  
最初に冷たい春の風が吹く処へ、  
そこでは風は 軽い衝撃を受けた山の端を  
金切り声の舌で包み、渦巻いたかと思うと  
火のように上方へ燃え上がり飛び上がるのだ  
沈黙で冷たく湿った深みの上の  
岩でごつごつした歯から。ここを  
私は飛んでゆく 流れ続いてゆく一年の前を、  
荒れ狂う冷たい山の峯々を迎って、

そこへ空は走り下り止まるのだ；  
 そしてなじみの月に見つめられながら  
 私は楽し気に飛びはね叫びながら  
 水がシューシュー音立てて流れている  
 蹲っている暗い奈落を一つ一つ通りながら、  
 罅<sup>ひだま</sup>を東へ西へと振り回して  
 獣がひそむ雑木林をうろついてゆく、  
 静寂、罅が後方で碎けるまでは、  
 峡谷の煙った裂け目の向うは。

ここで 牧神の鋭い蹄の足が刻印したのだった  
 冷たい山頂にその伝言を、  
 曰く——我が導くところへ従え、  
 世界は全て 我が葦笛に合わせて跳ね踊るのだから  
 笛は上下に編み織られてゆく  
 天を地を全てぞくぞく身震いさせながら  
 おののく熱気とわななく冷気で；  
 膨れた姿のものは 貫き通して破裂させる；  
 待っている藪の中では 金切り声を響かせながら：  
 さあ、汝 生命あるものよ、奮起して目覚めよ！

ころがり降る日光が  
 ごつごつした岩壁にほとぼしり注いで  
 蹲る羊の群の中を丘に点々と見える  
 凍てついた岩々に当ってシューと音を立てるように  
 私はある深い谷間に突入する、  
 そこには最初のスマイルが薄青く含羞んで  
 現われ、頬に涙のしみをつけた泉が  
 私をのぞき見ている 近くの藪の中から、  
 裂けた掛け布をたくし上げながら、  
 もしも私が眼を上げて見るなら逃げ去らんものと。  
 燕は空に描かれた矢のように  
 突っ走り すくい取るように飛び交い、

弓づるの唸り声と聞えるのは  
かすかな高い素早い鳴き声で  
彼らは射るように急降下しながら紡いでゆく、  
音も立てずに 盛り上る喧騒をぬって。  
ハナミズキが その細っそりした木々の間で輝いている  
婦人の髪につけられた宝石のように；  
不意に小川が急ぎ流れてゆく  
逆戻りの歌を歌いながら、  
直立したつやつや光る岩々の辺りで  
白く泡立つ衝撃を受けてひらめきながら；  
すんなりした若い枝々は くっきりと鋭く張りめぐり  
白い藤づるは まるで恐れているかのように震えている  
急流で溶けた雪の上で、  
それは 流れるというよりむしろ 踊っているようにみえる。

それから四方八方で目醒めるのだ  
薄暗くひっそりした藪々から  
生長してゆくものの息づきが、  
これから生れんとするばかりか既に消え去った  
泉という泉の生きている沈黙が；  
そして森林の床の上で  
森の精たちが夜明けまで踊りまくるのを私は見つめる  
考え込んでいる泉が見物している中を。  
泉は胎児の動きを感じながら悲し気だ；  
そして彼女の湿った髪には被覆金貨が鎮坐して  
どきどき鼓動しているこの世の不協和音に合わせて  
踊るその不滅の舞踊を見つめている、  
牧神の用心深いかん高い笛が葡萄酒のように  
世に過ぎてゆく火となって燃える日々を  
吹き鳴らすのだが；それから上空では、  
彼の笛が次々に空に魔術を織り成して  
地上のまた別の泉の  
誕生の喜びと苦痛とで金切り声をあげる。

\*

聞きたまえ！ 藪の中から音がする  
だから私は 蛇のように滑り寄って  
その葉の繁る深みの中を覗き込もうとする  
そこには子供のように 泉がまだ眠っているのだ。  
冷たい灰色の古い岩の上では  
柳の一重の糸が降りかかって  
揺らぐことなき垂れ幕となり、牧神は——  
彼は宇宙開闢以来坐っていたのだが——  
じっとそこに居てじっくりと光景に思いを巡らす  
静まった水溜りの傍の光景に、そこにかがんでいるのだ  
彼の顔と曲がった空とが  
震えながら音もなく親し気に。

牧神は ため息をつき 口唇へと笛を  
持ち上げる、その下を指先が  
愛しむようにさまよう；それから低く  
明瞭に素朴に彼は吹く  
単一の細い澄んだ旋律を、  
それは間をおいては流れのように展がってゆく  
世界がびりりと沈黙して  
彼の魔術の横笛を待っている間に。  
突然の調べが 銀色にかん高く  
幅狭く水が丘を下る時のように  
さざ波立てて跳ねかかる まるで  
柳の垂れ幕の上で砕けた水銀のように  
引っぱられて、そしてそこから  
その調べは 止ることもなくすらすらとさまよって  
静かな牧き場へと入ってゆく；と それは  
息づきながら停止して再び  
登ってゆく、まるで空に達するかのように、

何かの鳥が上昇しながらあげる  
銀の叫びのように。一つの音色が選り出すのだ、  
一本の薔薇の回りをぶんぶん翔び巡る  
銀蛾を、それから低く身を落ちつけるのだ  
悲しめる者たちの上に、彼らは  
柳の緑の染みた水溜りをずっと進んでゆき  
その冷たい処女の純潔の裡に  
横たわり 眠るのだが。

ああ、世界よ、  
その周囲には人間の夢が藪のように  
細く冷たく巻かれるのに  
それでも決して老いることがないなんて！  
大地の心臓は冬の雪で燃え立つのだ、  
愛情に充ちておののく牧神が 他の泉を  
求めてこれ程冷たく悲し気に  
笛を吹き鳴らす時に；そして衣服をまとめて坐って  
乾いて苦しんでいる眼で悲し気に  
変ることのない空へ空へと身をかがめながら  
牧神はため息をつき 光景に思いを凝らすのだ  
この静まった水溜りの傍の光景に、彼自身の顔と  
撓む空とが震えながら音もなく  
親し気にかがむ処で。

\*

穀物で揺れる鳥の上の  
大空はすっかり雨で灰色になり、  
桜ん坊の果樹園は静止したまま雫をたらす  
その桜花が静かに湿った  
黒い大枝から滑り落ちるのに聞き入りながら。  
そこには びしょ濡れの広い藁屋根の家が

瞑想に耽りながら湯気を立てている。私は  
涙を流している窓の下に坐って  
空のほどけた髪を自らの上に引っぱっている  
山々の縁の辺りに蹲っていた。

私の眼は 降ってくる雨で平和に満たされて  
靄立つ平和を見すえて考え込む、  
したたっている樹の下にしゃがんで、  
そこには強く湿って私のところにまで  
吹き出る沃土の匂いが昇ってくる、  
大地のゆるやかに息づくなつかしい胸の上に  
匂いが; びっしり膨れて  
緑の新芽を光の中に突き出した木の実の匂いが。  
その光は私にとっては 今後何年も影なのだ、  
私の眼はかすんでゆくし 私は無口になってゆくものだから  
太陽に浸って歳をとり 寿命一杯  
生き続けた物の力を失って;  
そしてまた 名付けようのない苦痛を  
十二分に生きて再び知っても  
もはやこれ以上私を大地に送って  
あれこれの価値について戸惑わせたり  
「これから！」などと叫ばせたりはしなくなるのだから、  
この世のあらゆる美を  
私の眼の囲りにしっかり引き寄せてしまえなくなる  
自ら求めてなるわけではない私の無力に対しても。  
だが 日中 その踊る光の、  
水面を波立たせる無分別な働きを  
見るのに満足して。それから私は  
薔薇の花の下にゆこう。眠そうに  
太陽にずぶ濡れになった大気に浸って  
望みも意志も配慮もなしに  
私の柔らげられてぼんやりしてゆく眼が  
湾曲する空に縛られたままに。

\*

ポプラの木々が壁の向うに見える  
髪を垂らしながら、そして私に呼び掛ける  
震える両手を私の方に曲げながら  
見えるものを囁きかけながら：  
サンザシの花で白くなった谷間を貫く  
霞んだ、物音のしない道について。  
両手には 噂好きなブナの木々が  
大地の半ばと大空の半ばに  
手を伸ばすライラックを眨める身動きを見せている；  
そこでは ヤマナランが葉を震わせて  
興奮して一隊となって寄り集り、  
斑の樺の木々のひらひらはためいている手は  
自らの素早い銀色の光を投げている  
緑色がかった白色に紡がれた森の沼沢地の中を。

そこで私は 孤り 歩き続けてゆく  
ゆっくりと笛を吹きながら牧神が出かけて行って  
静かに草を食む羊の群を誘い寄せている処へと、  
その間ムクドリモドキは 嗚いてばたばたと  
真昼、埃まみれの草丘を動き回って  
平和に震えているが、遂に牧神は  
その笛の音をやさしく鳥に吹き鳴らすのだ、  
そしてそれ以外には、何の物音も聞こえない。  
今やそのムクドリモドキの黄金を巻かれた喉は  
長い冷静な柔らかない調べを撒き散らす；  
壮厳な群となってゆっくりと複雑に  
巡回しながら、その欲望を  
示すこともなく、丁度 青い空間にいる時のように  
彼らは縫って横切ってゆく、真黒に織られた  
レースの襲のように； 金切り声が響く、



左右に鎧戸が揺れるように。

\*

ぞくぞくさせるそよ風に愛撫される  
木々の彼方の草丘を、  
ムクドリモドキが鳴いてばたばた動き回っている間に  
羊飼いたちはそれぞれの羊群をひきつけて進んでゆく。  
時は真昼、大気は  
静かにちらちら光り続く、どこにも  
物音一つしないのだから。大空は半ば目醒め、  
半ば眠りながら、穏やかだ； というのも 平和は潮にされるのだから  
世界の縁の遙かに展がった溝と  
木々との間に、そこからあの横笛の調べが  
起り、私は耳を澄しながらそれを聴く、  
私の耳に液体のように落下してくるのを：

「静かに来たまえ、牧神よ、私の呼び掛けに答えて；  
さあ、さあ、真昼は涼しくなって過ぎるだろう  
今は太陽に蒸溜されて熟した草の上に  
刃もなく捕われているが。

「地上にはどこにも全く物音がしない、  
空という空には全く息づきがない；  
ここを〈暖かさ〉と〈平和〉とは手に手をとって  
〈静寂〉の反転した眼下を進んでゆく。

「私の呼び掛けは果てもなく展がってゆき  
私の甘美な呼びかけは鼓動しガタガタ鳴る、  
来たれ、牧神よ、そうして厳かに  
君の秋の訪れた頭髪を 肩の方へ漂わせたまえ。

「君の指は物憂そうに

少々よじらせて、掌は上へ翹わせたまえ  
静まった真昼は 我らの上で待ち受けており、  
羽も彼の胸では動かない。

「物音もなく 笛のかん高い響きもなく、  
君の足は地上でも音を立てない；  
大地は充足し 静かに熟して  
地上にはどこにも物音一つしない。

「全てを見そなわす偉大な神がいて  
私の喉にこの恩恵をほどこすのだ：  
私の呼びかけで静寂にさざ波を立てようとして、  
世界が眠っていて、しかも真昼間に。」

ムクドリモドキの歌が 冷たく甘美に  
長くつんざいていくのが聴こえると  
私は立ち止って聞こうとし、呼吸も止める、  
埃まみれのハリエニシダやヒースが  
呼吸を止めるみたいに、というのも彼らの魔術めく呼び掛けは  
休止する大地をすっかり擽とりこにしてしまうのだから  
真昼には； そこで私には分るのだ； 空は  
動かずに休止するのだと、  
黄金の覆いをかぶり 霞みのかかった青を夢想しながら；  
それからムクドリモドキは旋回しながら  
牧神に大空を護られてゆく、  
無慈悲な眼で大地を貫きながら、  
紙片は燃えて投げ出される、  
静かで深くて広大な湖の上に。

\*

森のかすかに翳る縁に  
埃をかぶったサンザシの生垣が

道の傍にあり そこを歩いて私は歩いてゆく  
足を冷さんとして 深く豊かに繁った草の中へ。  
私は立ち止って 小川の歌に  
耳を澄ます、小川は柳のつぎはぎの  
蔽いの背後を溢れ流れているが  
その蔽いの物憂い夕べの影は  
自らの黄金をばらばら沼沢地に寄りかからせ  
そこを星とばかりに輝くヒナギクが踏み渡ってゆく、  
そして はつらつたるポプラの木々は  
ゆっくりとそよ風の中で向きを変え  
その様々な面を太陽に向けてパッと輝かせ、  
ゆっくり一斉に揺れるのだ。  
ここで静寂が魔力を曇み込む、  
静かに翳った小谷の中に、  
そこで私は休息するが すると木々の葉越しに  
太陽が音も立てずに模様を床の上に  
織り成すのだ。葉陰の沼沢地は  
斑の影の中に物思わし気にしているが  
日光ははっとして滴らすのだ  
ブナノキやハンノキから指先を、  
するとカンバは突如跳ね上って  
静かに眠そうに直立する、  
自らの細い四肢にすがって、  
彼らは 影が薄れてゆくにつれて白くなってゆく。

ここに横たわっていると 私の空想は馳せてゆく  
静かな徑の木が 影を  
夢見るような状景に与えている処へと  
その上には広大な枝が  
天蓋を被いかけている。小川は 長い静かな  
日々が横たわり夢みている流れであり  
そこを強壯な夏が歩いてゆくのだ——  
頭の周りにライラックの茎をめぐらせ——

木々の下の影で

その冷たい流れに膝を折り包ませて;

私が その間 葉陰に横たわっていると

ニンフたちがぞろぞろ その沼沢地に降りてくる。

泉の中で白かった彼女たちの四肢は

今や日光で黄金色に燃えている。

彼女たちは縁に近づき、そこで 足元に

伸びた逆さの己れ自身に出逢う;

すると彼女たちは 物憂そうにそこに跪き

風に吹かれている短い髪を梳いて編む、

水中に滑り込む前に――

銀色の冷たい流れの中の 暖かな黄金色になって。

夕べが戻ってきて 日光が沈む

斑となって 葉の覆う壁と壁との間に、

まるで 金色の蝶が翅を

ゆっくりと脈打たせ 羽搏いているように。ゆるやかに歌うのは

その流れ、常より低い調子で

眩きながら、静かに下ってゆく

ひんやりさせる蔓を一面に生い茂らせた

厳かな紫色の石の間を。

没り陽が西の空を染める;

夜がまもなくやってくる、そして今 私は

宵の明星の方へ躓いてゆく。

羊の首の鈴が遠くかすかにリンリンと鳴り、

音もなく雫を落とす、羊が

深い静かな黄昏の露で湿った

牧き場を雲のように動いてゆく時に。

私は身体を伸ばしたり丸めたりしながら瑞々しい

芳しい草地の中を進み寄ってゆく、すると大気は

私の柔らかい髪より更に柔らかくなる。

私は眼を上げる; 緑色の

西方は湖で そこには百合が一本  
投げられたことがあった。——見てごらん！  
私の上に展がっている牧き場牧き場には  
蜜蜂のようにびっしりと星々がぶんぶん唸っており、  
手を伸ばしているインクのような黒い木々が  
空をさあっと一撫でしている。私は横になって聴く  
多産な一年の声を、  
その間にも闇はおぼろに深まってゆき  
私は夢みることもない眠りへと滑り込む。

\*

カアカア鳴きながら ミヤマカラスは健れて飛び合い  
夜を凌がんものと混雑した家へ帰ってくる。  
翼をもつ他のものたちは全て静かで  
ただ、夕べの空の丘を慌てて降りてくる  
ミヤマカラスだけ。深紅色が敷かに  
蔓の這う壁に降りる；  
没り陽の角笛がゆっくりと鳴り響く  
待ち控える空と地上の間に；  
空に描かれたヒマラヤスギが  
太陽をゆるやかに隠す、湖面を  
燃え立たせて繰り返し見せた太陽を、  
滑めらかで静穏でそして揺れることもなく  
遂に 白鳥の逆さの優美が  
考え深げにその温和な顔に花飾りをつける、  
展がってゆく縞で、丁度 開いた扇を  
白く物憂げな手で動かしているように。

今や 夕べの祈りの鐘の歌が  
日暮の下を流れうねってゆき、  
たそがれの銀色の喉は

それぞれ共鳴し合う調べをゆるやかに反復する：  
かくて暮れかけている一日は 悲しめる者に  
王侯も与えることの叶わぬ恩恵を与えるのだ：翌日というものを。

西に傾く太陽は壁をよじ登ってしまった  
それで黙って我々は 夜のとばりが降りるのを見つめる  
没り陽がぐずぐずと木々に長居をして  
黄金に射られた微妙なつづれ織りとなり、  
空は頭上でピロードとなり  
そこでは花卉のある星々が天蓋となる  
一列に展がったシーキーン飾りのように  
髣も破れも汚れもなく。

涼しい風が囁いている 花壇で  
夢みている花々の顔のそばで、  
修道院の乙女たちのように 眠りを  
外の深みからの見慣れぬ夢で満たしている。  
どの丘でも大隊をなす木々が  
動かぬ膝をにじらせて空の方へと行進しており、  
ヴェールの上の蜘蛛のように  
月が昇ってゆく。ナイチンゲールは  
空を背にした木々の中に迷って  
大声で 宝石のような叫び声を繰り返す。

\*

私は悲しい、だが まだ私には分らない、  
探っているにも拘わらず その理由は：  
それで今 夜のとばりが降りるので 私は行くことにしよう  
海陸風が一緒になって 小川の上を  
流れてゆく処へ、その小川のかすかな光も見せない深みは  
慈しみ深く歌っている、 月によって粉碎された

砂地の上で小川が眠っている間も。  
 だから そこに私は横たわって耳を澄まそう それが  
 泣き歌って 岸辺なき遙かな  
 空から落下してきたさまよえる星を  
 愛撫している様に、その間も風は霏ごもる小川の中で  
 夢みながら笑ったり泣いたりして  
 果樹園の木々のことを囁く、  
 目的もなきそよ風に揺さぶられた木々は  
 果実をつける花々を しぼんで落ちるがままにまかせて  
 動ずることもないし、口唇と口唇を合わせるごとく  
 彼らは霏に包まれた草々に触れる、そよ風に  
 あおられてさざ波立てる草々に。

ここに立つのが

群生するライラックで、絹の胸もつ  
 空に向かって挙げる叫びのようにかすかな風情；  
 彼らは頷き揺れ、雨のようにゆっくりと  
 ゆるやかに降りてくるその花卉は 草を  
 汚す、まるでその花卉をさまよいながらそよ風が  
 銀色の操作で滑めらかにするみたいに。  
 それで我々、沼沢地の大理石像どもは  
 葉陰で夢みながら  
 悲哀を覚えるのだ、なぜとって我々には分るのだから、我々  
 以外の全ての者は衰えて倒れてゆかねばならないものだし  
 その空に鎮坐する月は  
 己が髪を引っ張って眼を覆うのだと：  
 彼女には 花々が吹き飛んでいって死ぬのがみえる、  
 落ち着いて静かに、  
 で 遂に泉は 待ち控えていた沼沢地で湧き出し  
 最初の薄っすらとした枝の影は  
 意に反して落下する、すると燕の叫び声が  
 壮快な空から降りてくる、  
 か細く冷たく且つ炎のように熱く

泉とは名ばかりの処に。

その小川は音も立てずに 穏やかに流れてゆく  
周囲に集まる暗闇の中を；  
気まぐれなそよ風に震えながら  
私の周りには インクのように黒い木々が立っていて  
何かの小鳥の大きな叫び声に占められているが  
遂に空がその花盛りの星々を振り落として  
木々の仄暗い障壁の間を探り回って  
大声で叫び、各々その連れ合いを求めて  
古くからの大地をあちこち 感覚もなくして  
みたところその罪のない災いにも  
気付かないかのような、  
だが、彼らの悲しみを 彼女は知らず  
また 彼女の胸は乱れてぼんやりして  
自らの悲しみを彼らに鼓動で伝える。  
暮れゆく一日は 悲しめる者全てに与えるのだ  
如何なる王侯も与えることの叶わぬ恩恵を：翌日というものを。

\*

環のかかった月が 無気味に姿を見せる  
空に現われた気のふれた婦人のように、  
遙かな世界の毛深い両脇腹と胸を  
愛撫しようと 平たい手を下に降し  
白い両掌を沼沢地に  
肘は葉の繁った影に深く突っこんでいる、  
そこでは鳥たちが おのおの静まった藪で銀色に  
眠っている、そこで震えて大声を出している  
ナイチンゲールを目醒めさせようとして、  
その叫びは 散らばった銀の帆のように  
空色の海に展がっている。  
彼女の両手も私を愛撫している：



私の鋭敏な心までも彼女は敢えて、  
常に空中で向きを変えながら  
彼女の白い足は私の眼の中に映されながら  
大波にも過労にも壊れない  
私の胸の周りに 畏を織り上げる、  
何しろ月は気が狂っており、彼女は年老いているし  
多くのものは 彼女が語った人生の一連り；  
また 多くのものは 衰えてゆくのを彼女が見た美しいもの：  
それらは通過し、通過してゆくが、何処へとも分らない。

静まった大地は 大層穏やかで大変古く  
その荒野のヒースの下で 夢をみる——  
そして棘の多い生垣からの濃厚な匂いは  
どこか暗い峡谷の端で  
途切れて雪のようになるが そこからは  
髪の毛のように柔らかく濃い霧が  
流れて 月の中で銀色になる。

星々がさあっと降りてくる——それともそもそもそれらは星なのか？——  
松の暗い侵食された横枝へと。  
物思ひ月に濡れた丘一帯で  
ハナミズキが甚だ冷たく静かに輝いている、  
手のように 手のひらを上にして硬直して  
空への祈願をこめて  
星々がそこへ展がって 白く凍って  
夜のピロードの上に落ちつく時に。

\*

世界は静かだ。何という静けさだろう！  
私の貧るように伸びている耳の辺りで  
大地は仄暗い沈黙の中で  
脈も打たず、沈黙は私の耳の中へ入り込んできたり

その背後に取まったりするので 遂に  
私の頭は一杯になる： 私はその沈黙が  
水のように胸へこぼれてくるのを感じる。世界は、即ち  
牧神の指が曲げて当てがわれている音の出ない  
ヴァイオリンは、待つのだ、怠惰に冷静に  
そして音もなく畳み込まれるのだ  
見通しのきかない穏やかな岩の窪みに  
月光の衝撃を受けてなまくらになって、  
遂に弓を握む手が  
降ろされる； それから 壮重に強力に低く  
それは 彼の待ちもうけている耳へと上げられる。  
過ぎ去ってゆくあらゆる年月の音楽が  
彼の上を流れ、氷と黄金の  
彼の胸へ下り、まるで西方で  
没り陽が燃え上るように、そして どの夜明けも全て燃えるのだ  
東方へと、すると穏やかな空は回転するのだ  
常に彼の凍った頭の周りを：  
生きるための平和、死のための平和 と。

そして 弓を引く手は  
止りはしない、壮重に強力に低く  
彼の曇った頭の辺りに その手が  
世界中の果てしなき悲しみを巻き毛にする時に、  
その間 彼は 乾いて打ちひしがれた眼を傾けるのだ  
群衆の上に； 恐らく彼はため息をつくだろう  
自分を見つめている充実した全世界を求めて  
季節が明かるさから薄暗さへと変化する時に。

すると 私の眼もまた 涙で冷たくなっているのだ  
堂々と行進してゆく年月を思って、  
無口で力強く否でも応でも金属で被覆された  
人生を悲しんでいる古い大地を思って、  
またそれは 大理石の束縛を受けていなければならぬ

私のように 声も出せず実行力もないのだから；  
そして私の彫刻された眼は 暗い世界の  
黙したまま夢見ている顔を抱擁するが  
それは 私の奇形の指が 彼女の胸を  
抱き締めてすっかり苦痛を柔らげ  
私の貧ってやまぬ心が ひっそりと  
耐え難いまでの至福で充たされるまでに到ったからだ。

\*

丘は柔らかなブンブン唸る音で木霊し合っている；  
それは そよ風が休止して  
黄金の針金で縛られた星々の上で  
深く充実した音楽をかき鳴らしているからで それに合わせて  
生命の歌が永年に亘って歌われてきたのだ；  
そして音もなくその弦の間を  
星が、降ってくる薔薇が、縫うように進んでくる、  
この天上の庭でしか育たないものが；  
空をかき鳴らす手による美に  
打たれて啞然と垂れ下った  
手は消え去ってしまった： だが それでも私には見えるのだ  
この手が素早く音も立てずに  
今 私の眼前を横切って滑ってゆくのが、  
あの時 空を滑り下っていったように。

そよ風はやさしく、揺るがぬ炎は  
炎を生み出した森によって冷やされて  
斑の草原を滑り渡って  
海のおぼろな壁を登ってゆく；  
波の小馬たちの鬣たてがみを梳き返すのだが  
そこでは 水は静かな深みと  
静寂を保って黒く震え  
くり抜かれた空を舐めている。森は

動いてかすかな遙かな神秘の調子に合わせている、  
牧神の葦笛に：彼はといえば一人きりで  
どこか岩で冷たくなった銀色の小谷で  
フィロメルの歌を薄めている、  
彼女は おぼろに反響する暗い四阿で悲し気に  
遙かな遠い世界が芽吹き花咲くのを見つめ、  
蒸溜された霊気の中の月を見つめている、  
月は眠りながら その歪らな顔にこぼをつくり  
雇らせて、空中で裸のまま夢みている、  
フィロメルがここで裸のまま夢みている間を。

牧神の細い調べは 澄んで悲し気に鳴り響き、  
神秘を醸してかすかになる、かと思うとまた大きくなる；  
垂れて死んでゆく軽やかな手足を映し、  
呼びかけ叫ぶ夜の声々をなだめ、  
風の遙かに求めゆく調子を蒸溜するが  
そこは休んでいた泉が 死んだり生長したりした処だった；  
つまり 夜の鳥たちの宝石で飾られた叫びを鎮め、  
影の微細な差違を燃え立たせて  
鳴り響く回廊や広間の  
果てしない迷宮の壁という壁を揺らめかすが  
そこでは音と沈黙とが その場の眠気を催す真昼を  
無音に保つのだ。回廊や広間の眠りよ 安らかなれ。

\*

終日 私は風の前を走る、  
鋭敏に青ざめて目的もなく、  
猟犬たちを前にした狐のように  
太陽に射られて柔らかく肥えた草原の丘を、  
辺りに漂うカリカリと暖い焼き立てのパンの香；  
そして頭上に展がる大空は

その顔に黄金色と紫の  
ヴェールをかぶっている。手足が疲れて  
私は喘ぎながら身を投げ 憩うのだ  
大地の鋭く燃えている胸に。  
私はべったり横たわり その冷たく鼓動する  
心臓をまさぐる、それは決して老いはしないが  
それでも歳月が過ぎ去ってゆくのを感じてきたのだった、  
そこに生い育っているヒースに木々に草に。  
真青なヴェールが大空から垂れ下って  
世界の縁にちかちか輝いて被い掛かる、  
青くひらめいている海が  
無限に脈動している間。

起きよ！ 去ろう！ さあ 私は出かけることにしよう  
どこか果樹園の黄金の列なす  
溢れんばかりの芳醇な梨や甘い  
すぐりの果や熟れて黒ずむ葡萄を食べに。  
私は歌をロずさみながら それらを口唇で押しつぶして  
頬や指先を染め、  
それから両手を一杯にするが、何故だかは分らない  
そして再び 大空の下を歩み去る  
木々の間を通り、やはりヴェールで覆われた  
夢のような黄金色の小川のほとりを過ぎて  
もう一度どこか暖い沼沢地で横になろうとする、  
そこは紫の遮蔽幕で深い壁となっている、  
採ってきた果実は傍らにおいて、私は横になる  
私を覆う外套のように、  
大空から篩にかけられてくる淡い太陽の中に：  
私は抗すべくもなく眠りに沈み込むが  
その間太陽は滑めらかに西へと  
滑り落ちてゆき、緑色の薄明りが私のいる沼沢地一帯を  
閉ざす、そこには太陽が満ちていたのだった  
カップの中に黄金の葡萄酒が取っているように。

\*

今や黙々と秋は 木々を燃え立たせて  
ゆっくりと炎を上げさせ、穏やかに眺めている、  
変わりゆく日々が大空を焼きこがすのを、  
自らの静かな眼に映った大空を、  
そうして秋が跪くと 周囲に  
果実豊作の野がかがみ込み  
その縁々にずっとポプラの木々が並び続く、  
衰えてゆく太陽につやつやと研かれて。  
葡萄園は丘を管々と上へ展がって  
空へと向かい、埃にまみれて静かに  
びっしりとふさふさした紫の葡萄と  
黄金色に溢れんばかりの果実に満たされ、その形状は  
太陽で熱く充実する。ここで各々  
ゆっくりと破裂してゆく椗とブナノキは  
秋の夢みる膝の辺りで燃え上る、  
その優美な掛け布の鬘をちかちかさせて。  
いずれも密やかに、光の炎は  
青みがかった白い地平線上で  
松明となり、松の木々はブロンズ色で  
その彫刻された葉を固く伸ばす、  
静まった底知れぬ峡谷の上へ、  
そこでは 彼らの影は緑色に  
それから深い処では紫色にと 変るのだ  
待っている冬が眠っている処で。

\*

月は狂って おぼろに燃え、  
その詮索好きな指で

藪や矮林を好奇心で  
裏返しにし、それから彼女は  
周囲を見回すのをやめる、それで小高い草原は  
悲し気に素早くびっしりと繁茂し  
暗い陰のある岩々を一つ一つ  
また 衝撃で丸く盛り上った結晶を 粉碎する  
厳かに列をなしている処へ衝撃を与えて；  
するとその後、どの影も空の方を  
見つめ続け 耳を澄して  
輝いている沈黙に聴き入るが  
それは星を見つめ続けることで輝いている、  
星は鋭く悲し気に、厳かに凝視する狂った月を  
輪で囲んでいるのだ； 風は単調に  
じっと考え込む、が そこでは揺さぶられた結晶が生長したのだった  
死にゆく年月にそなえて 裸の  
胸を持ち上げる 花咲くことのない野で。

それでも私は動かない、というのも私は  
この秋空の下で悲しいからだ、  
私は突如眼が見えなくなり、ここ  
私の霜の降りた丘の麓で寒気がするのだから、  
それで私は月に向かって 苦痛で身を固くして叫ぶ、  
注意も払われないまま、 というのも月は再び  
悠然と見つめているのだから、その間彼女の眼の下では  
静かな世界が燃え上って死滅してゆく  
そして木々の葉は滑り落ちては私を悲哀と  
存続したい欲求とで覆うし——  
世界が冷たく乾涸びて待っている間——  
それを好むのだ、死にゆく年と共に死んでゆきながら。

\*

世界は動かず音も立てず  
辺り一帯はこの白い沈黙の中にあり  
まるで頭布のようだ。大層静かなので  
大地は呼吸したいとも思わずしようとも  
しないのだ。私の庭は荒涼と白く  
物音一つしないが、光が降ってきて  
私の世界の端で氷が張りつめて  
幽霊じみた藪と生垣を突然  
持ち上げるのだ、私の世界は 吹き寄せ入り込んでくる  
雪の垂れ幕で 隠されている； 早く かと思うと ゆっくり；  
穏やかな灰色の空から 果しなく  
降ってくる、何か遙かなる神の眼が。

音もなく静かな薄片が 滑りすぎてゆく、  
ガラスの板に落ちる涙のしずくのように、  
ああ、上空には神のようなものが居るのだ  
その、憐みの、苦痛の、そして愛の涙が  
ゆっくりと凍結し、ゆるやかに溢れてゆくのだ  
私の冷え切った大理石の悲痛の上に；  
あの水溜りは、今や氷と雪に封じられて  
下で静かに夢を見ている、  
その宝石の眼の中に  
泉に映っていたのを知っているあの空を<sup>とど</sup>留めながら。

何と柔らかなことよ、私の顔の上の雪は！  
そして細やかに冷たいことか！ 私には恩寵が見える、  
その果てない静止の中に、  
私の奴隷化された無能に対してのが：  
静穏と休息をもたらして  
私の眼をどんよりさせる哀れみ深い  
陶からの慰め； しかもゆるやかに入り込んでくるのだ



平和に満ちたヴェールの上の襲のヴェールの  
 下で待っている大地の上に、  
 鎮め保ち祝福するための翼のように。

\*

我々に常に可能とは限らないのは何故だろう、  
 死滅してゆく一日に引き続いて生ずる  
 そっと刺戟する平和な灰色の  
 この無限の空間に浸ったままにされていることが。  
 ここで私は 私の拘留中の悲哀を麻痺させられる、  
 夜風の溜め息と流れのうちにあって、  
 だが 我々は、夜 夢をみてきたものだったが、  
 今や、提燈の光で  
 眼醒めさせられるのだ、その輝きの中で  
 幻想のように右に左にと揺れながら  
 向かってゆくのだ、けばけばしい贅沢をこらし、  
 恩寵を奪われながらも舞踏会は催されて  
 踊り手たちは 姦しい人群れの中を  
 恐しく大声を発するブラスホルンへと。

高鳴る音が 突風のように打ちつけてくる、  
 どちら側からも。私はいつも  
 こういう汚らわしい激しいものが  
 無防備の泉を汚しているのを見なければならぬのだろうか、  
 背を向けることも出来ず  
 燃える眼を閉ざすことも叶わぬままに。  
 ポプラの木々は どうしようもない恐怖で  
 震え揺れ、夜は  
 情容赦もない支配の裡に無力となって  
 隠していた手を持ち上げる、まるで  
 停止を祈願して 飛んでいる星々を

掴まんとするかのように。

かつては平和があった、

薔薇の花が咲く処で穏やかに手渡されたのだ、  
そしてヒヤシンスも 真直ぐ何列となく咲いていた；  
そして木々の間で静まっていた。何たること！  
私の大理石の心は 哀れにも忘れてしまったのだろうか  
平和な夢の中の、この、かつては止むことも  
褪せることも決してあり得まいと思った波のように寄せてくる  
騒音を。それでもあの高鳴る音は降りてきて  
私の庭の壁と壁との間にすさまじく衝突し  
私の耳の辺りに突風のように鳴るが  
私の眼の方は 涙に冷やされることもなく  
引き寄せられてゆく、私の石の心が引き寄せられてゆくように、  
遂に東の方が 夜明けの中で出血し  
一日の清浄な顔が  
それらをこっそりと追い払うのだ。

\*

一日一日一晚一晚が 毎年、  
私を盲目にし且つ欺く網を  
織り上げてゆくが、私の心は真底あこがれるのだ  
周りの世界が向きを変えるたびに  
私が知っているのに知り得ないものに、  
それは上の大空と下の大地との間にあるのだが。  
終日 私は見つめている、日光が内部に  
溢れて冷気を追い払うのを、  
夜がここの壁の間に何層にもわたって  
置いておいた冷気だが、そこにはもはや  
なくなってしまうのだ。眼を半ば閉ざして私は見ているのだ  
平和と静寂が流れるように

壁から壁へと浸してゆき、それらを しみ込む暖かさ  
沈黙とで覆ってゆくのを；  
壁には分りもしないし、分ろうともしない  
何故夕べの水が流れながら溜め息をつくのかを；  
何故 北極星の周りに星々が  
回転してめらめら輝いたり 凍ったり 燃えたりするのかを；  
また 何故 四季が、春の方へ巡回しながら  
生命の鐘々を鳴らすようにするのかも。  
彼らが悲しむのは 口がきけないからではない：  
彼らは神になろうとは思わないのだから。

……私は太陽にどっぷり漬っていて、遂には  
すっかり太陽になってしまう、そして流れるように  
台石を去って 静かに  
それぞれの列を流れてゆき  
彼らの香りのよい息と  
下の大地の息吹きを吸い込む。  
時間は今や、顧みられることもなく過ぎ去るだろう：  
私が草を暖める生命なのだから——

それとも大地が私を暖めてくれるのだろうか？ 私には  
分らないし、分ろうとも思わない。  
私は花々と一体なのだ、  
私の奴隷の身が終った今となっては；  
そして 地上で私は眠って  
決して眼醒めることはないだろうし、決して泣くこともないだろう  
私知っているのに知り得ないことを求めてなど、  
上の大空と下の大地との間で、  
というのも 牧神の理解力のある眼が  
静かに私を空から祝福して  
彼の悲しみを知っている私に与えてくれるのだから、  
私の明日となる筈の眠りという贈物を。

## 終 章

五月がこの庭を歩いている、優美に、  
髪にヴェールをかけ  
やさしい緑と黄金で飾っている乙女のように；  
それなのに私の大理石の心は冷たく  
これらの壁の中にいる、そこは人々が  
しっかりクリップで留めたエメラルドの草地を通りすぎながら  
愚かしい眼で私をじっと見たり  
騒がしく陶然として  
私の大理石の前に立ったりする処、そうこうするうちそよ風は  
震えている木々の間で囁いていて  
静かな丘や平原の歌を歌うし  
雨がやさしく降りてくる小谷や  
果樹園の歌を歌う、そこではこれみよがしにピンクを誇示する木々が  
ぶんぶん唸る巨万の蜜蜂で黄金色の斑となりながら  
灰色に褪せた屋根の薫ぶきを  
巨大な蜂の巣のように取り囲んでいるのだが。去ろう  
海に差し出ている輝かしい松の木々の処へ  
そこでは波が絹のようにぐずぐずと  
棚なす砂に留まっているし、また スゲが  
大空を背に盛り上がる砂丘の  
端の辺りで灰色にさらさらと音立てているのだから、  
空には絵に描いたようにカモメが旋回し飛び交っている。

ああ、これら全ては 何と私に呼び掛けることか  
絶えず大理石に縛られていなければならない私に、  
年月が変化することもなくめぐってゆく間。  
私の心は一杯になっているが 涙を流したりはしない、  
変ることなき空へ向けられる  
私の燃え立つ彫刻された眼を冷やすためにも：  
私は年月が変わってゆけば悲しいことだろう、

それどころか 悲しくも束縛された囚人というところだろう、  
 というのも 私のめぐりに四季が移り動いても  
 私の心はただ 冬の雪しか知ることはないのだから。

1919年 4月, 5月, 6月,

了

## II. 『緑の大枝』 *A Green Bough* (1933)

### I

私たちは坐ってお茶を飲んでいた  
 ある夏の午後ライラックの下で  
 気持よく 膝にぱりっとした亜麻布を  
 広げて安らいで、  
 そうして私たち三人は坐っていた  
 おずおずした満足感を抱いて  
 互いに相手に こんな風に思わせてはいけないかと恐れて、  
 こうして一緒にいて若い月が含羞みながら仰向けに  
 なっているのを見、一番星を見つめていて  
 何と幸せなことかなど。

そこへ婦人たちが現われる：  
 薄地のスカートを纏った撫で肩の生き物が通りすがりながら  
 私たちを不思議そうに眺めてゆく。  
 その一人 私たちをもてなしてくれる女あるじが 近くに立ち止る：  
 ——おくつろぎですか？ と彼女は訊ねる。  
 ——お淋しくないでしょうか、  
 もっとお茶は如何ですか？ お煙草は？ よろしいですか？——  
 私は彼女にお礼を言いながら彼女が行き過ぎるのを待つ：

私たちには彼女らは 仮面を被っているように見える。

——誰が？ ——撃たれたんだ

昨春——気の毒に、彼の心は

……医師たちが言うには……休養すれぱうまく——

お茶や煙草や本などでそれぞれ忙しくしながら

彼らの声々が私たちに届く ミヤマガラスが纏れ合っているみたいに。

私たちは黙って仲よく坐っている。

——五月下旬の朝のことだった：

白人の婦人が一人、白人の浮気女が藪の近くにいる、

昇り立つ白が湖に映えていた、

それで私は 古いなじみだったが 夜明け前に外へ出ていた

小さな尖った取っ手のある器具を手にして、

空がちかちかと展がる中を 彼女の跡をこっそりつけていった、

私には分っていた 好きな時に彼女に追いつけると、

彼女ほど早く走れるニソフはいなかったのだから

私たちは登っていった、上へ上へと

そして彼女が森の端にいるのを見つけた：

暗く翳った森で、私はその縁のところまで立ち止って

彼女の両腕や冷たい呼吸を感じていた。

弾丸がここで私に当たったのだつた、と私は思う

左胸に

そして私の小さな尖った耳付容器を駄目にした。私はそれが落ちるのを見た  
コップに入った最後の葡萄酒だった……

私には好きな時に彼女を見つけられると思っていた、

が 結局のところ 私は彼女を見つけたのかしら。

人はこん風に死ぬべきではない

こんな日に、

怒った弾丸とか その他の現代風のやり方で。

ああ、科学は接吻するには危険な口だ。

私は思うのだが、人はエトルリアの投げ矢のように倒れるべきだ

大洋の女神たちが気まぐれな草に

舞踊で花を開かせる牧き場で、  
そしてこういう日に  
丈高い螺旋円柱になるべきだ： 私はなりたい  
紫の海の島のトキワガンに。  
それなのに、私は心臓を弾丸で射抜かれた——

——ええ、その通り：  
人はこんな風に死ぬべきではない、  
しかもこの世で何の大義も理由もなしには。

君のような人が遙かな空気の希薄な空を  
死の口の跡をつけてゆく話をするとは  
全く結構なことだ： 君には分かったのだ  
家庭と子供たちの至福は； 親譲りの  
生活と仕事と楽しみとの静穏は。  
そして、中でも特に、年取ることの静穏は。  
私たちは若すぎたのだ。  
それでも——彼は手で眼をこする  
——それでも、それ以外にはなり得なかったのだ。

私たちはマンハイムを  
襲撃してきた。君はその場所を  
見たことがあるだろうか。それなら分るだろう  
星という星の下に宙に浮いたまま 静かな  
闇が破裂して星を背に粉々になり  
そして光の矢に引き裂かれて震える波となって上昇し  
せかせかと無駄に明滅する波頭をみせている有り様が。  
真黒な大地が私たちを引き降したのだった。その夜  
弾丸で苦しめられる大気中から：  
大きな真黒な鉢一杯の螢……  
どこかはこれで終りだ：  
人はこんな風に死ぬべきではない——

人はこんな風に死ぬべきではない。  
彼の声は低くなってしまったので 風が彼の言葉を口にしている  
ライラックは頭を細っそりした茎の上で頷かせながら、  
彼が話している間 同意している、  
聴いてくれているか否かもかまわずに。  
人はこんな風に死ぬべきではない。  
半ば聴こえ、半ば沈黙の言葉が  
灰色の鳥たちのように宙に浮いている  
私たちの頭の辺りに

私たちは黙って仲よく坐っている。  
私は寒い、もう太陽は消え去っており  
空気は周りより冷えていた  
私たち三人が坐っていた処では。光は太陽のあとをついていった  
それで私にはもはや見えなくなる  
淡いライラックがライラックの淡色をした空を背に動いているのが。  
彼らは私の方に頭を一つの頭のように傾ける  
——老いた人よ——と彼らは言う——あなたはどのように死んだのですか？  
私——私は 死んではいけない。

私には彼らの声が 非常に遠くからのように聴こえる——死んではいけない  
彼は死んでない、気の毒な友よ、彼は死ななかつたのだ——

## II

ゆったりと横になりながら、彼は炉火の火明りが  
天井を動いて 向うの壁を下って  
積み重った波状になるのを見つめている、それらの上を  
黄金の川が流れてあくびをしている闇を下って  
巨大な怪物めいた頭脳の中を死んでゆく音楽のようだ。  
ゆったりと横になりながら、彼は彼女がそこに坐っているのを見ている  
炉火の火明りが彼女の髪に置かれた手のようだ、



炉火の火明りが 輝かしい物言わぬ黄金の  
 音楽を奏でる鍵けんに置かれた手のようだ。  
 黄金に浸って彼女は坐っており 膝の上の  
 静かな両手は 手の平を上向きにしてくつろいでいる、  
 炎が噴出して上昇するたびに黄金で一杯にし  
 炎が沈んで溜め息をつくたびに黄金を振りこぼし  
 壁に映る思うように形の変る自分の影を見詰めている、  
 その影は炉火の上昇下降と一致して  
 炉火によって鍵の上で奏でられる音楽に合っている、  
 鍵からは彼女の両手はさまよいて 下に  
 垂れてしまっていた。

その部屋の百合の生けてあるしろめ製の鉢は  
 私にはその暗がりを手で測って手の上でどっしりと  
 感じることでできる触さわれる実体へと  
 変えるもののようにみえるのだ、それは炉火が天井の上で  
 着実に回転させる車輪の速度をゆるめているのだ。  
 その炉火は着実にぶーんと唸っており 着実に車を回しているので  
 彼の頭脳はびーんと張って突如ひび割れるに到る。

何か他のものを奏でてくれ。

するとゆったりと彼の頭脳は  
 旋回して砕けやすい火花のように果しなく断片となり  
 また寄り集って渦となり また旋回するのが見えるだろう。

何か他のものを奏でてくれ。

彼は調子を  
 軽く自然に保とうとし、影が投げかけられるのを見詰め、  
 彼女の喉元近くのどもとの影がおずおずと  
 闇の中から手のように環をなして彼女を掴むのを見つめている。  
 彼の眼は彼女の衣服を締めている細いバンドの辺りを  
 慌しく指のようにまさぐり飛びかかって  
 背と腿の線を軽やかに辿る。

彼には己れの頭脳が火花をばちばち発しながら分解するのが見える。

何か他のものを奏でてくれ、と彼は言う。

そして闇に接して

彼の頭脳は眼の背後を月のように漂い、  
膨れ、法外にも退いてゆく。彼は眼を閉じる、  
隠されたものは二つの大きな叫びを押えるので、  
そして不安そうな険の上に幻影を見る：

それはまるで 彼女が階段を登ってゆくと  
膝もしなやかに彼女と共に登り、それと共に  
彼女のスカートの線が一本一本渦巻くのを見、  
変わりゆく影がさざ波を立てながら上ってゆくのを  
見るみたいだった  
関節を曲げたあとで； 微妙な腿、  
背中と喉とギャザーの入った列の律動など。  
突如現われてきた月が 彼の頭脳の中でめまいを運ぶ  
激しい雨が吹きつける回廊の中を行くように  
彼は人生を歩んで その終りに到らんとして  
壁を回転させるようにそれを回転させる

彼女は奏でる、そして優しく奏でながら 部屋が  
分解するのを見る、すると夢のようにその静かな壁は消え失せてゆき  
沈む、優しく奏でられている音楽が  
百合の香のする暗がりの中を優しく流れてゆく間。  
彼女は軽やかに投げられた花だ  
流れゆく川の上に、川はおぼろに  
柳が傾き立っている 静かな兩岸の間を流れ進みながら  
月が柳のとぼりを透かして凝視するのを見詰めている。  
丘陵は暗く涼しく、澄んで遠くにあり、  
その影の下で彼女は立ち止って憩っていた。  
彼女はいつまでもここに留っていられるのだろうか 雨が厳かに辺りに斜めに  
降っている処に、  
雨は彼女の胸に注ぐ星の光のようにゆるやかだ

彼女はいつまでこの辺りを漂っていられるだろうか  
くっきりと影立ち 雨のヴェールで妨げられた  
青い野の下を、星々が行列聖歌を合唱して  
再び彼女の心からの沈黙を讃美しようとする中を。

ゆったりと横たわりながら彼は感じている 炉火の火明りが  
果しなく波立つ姦しさを闇に打ちつけるのを  
素早く押し寄せる波が霧のようにとどろいて素早く退いてゆく。  
彼の頭脳はシューシュー音を立てて彼から火花をおとし  
彼の眼は慌しい指のようにまさぐり飛び交う  
彼女の喉元のおずおずとした影の間を、  
彼女の衣服を締めている細いバンドの辺りを  
そして背や腿の線を軽やかに辿る。  
彼は己が頭脳がばらばらになり火花を発するのを見、  
彼女は叫び声を二つ聴いたかのように振り返る。

彼は立って見詰めている 彼女が階段を  
一步一步、微妙にしなやかに登ってゆくのを、  
その神経質な力強さはいつも彼の驚きの的だったのだから；  
その仰向いた喉、その薄いござっぱりした衣服の旋回は  
彼の目の前で 裸の筋肉のさざ波のようだった  
突如現われる月よ：彼の頭脳の中で幻暈を運び、  
再び一緒になって渦巻く火花となって旋回せよ。

振り向いて彼女は立ち止り そこで震える、  
彼が着実に階段を登ってゆく時も見詰めたりはしない。

### III

洞窟は闇でうね立っていた。それから七本の灯火が  
軒で吹きさらされている黄金の蝙蝠のように  
目覚めて 逆さになった投錨地を滑ってゆき

聞こえぬ音の反響を七箇たてた。  
洞窟は音楽でうね立っている。遙かに噂になっていたが  
月に洗われた歩哨の背後で門が  
彼の掲げた戈に鳴り響く。すると光の  
蝙蝠が一せいに 傾斜した空中を旋回して降りてくる。

洞窟はもはや洞窟ではない：音楽のうねが  
弧を描いて壁に当って鳴り、大地の核から  
解き放たれた蝙蝠たちは 紡がれ漂う地殻を砕く。  
シューシュー鳴る海が頭上で荒れ狂い、それで彼は  
氷のような薄明りに眼を凝らして見るのだ  
水中の星々が溶けてさっと過ぎてゆくのを  
流れゆく燃える髪銀の槍をふるって。

海は唸り過ぎ、海で身震いしている岩々は  
しわがれた敗北した角笛のように遠くで吹く。  
今再び闇が戻ってきたと彼は思うが 黄金の波が  
宝石のきらめく波頭を砕いているのに気付き  
彼は黄金の壁で覆われる。彼の周りでは  
玉侯や司教冠を戴いた司教たちは 罪にうんざりして高軒をかいている、  
彼ら自身 天国を夢みてあきあきし  
今や眠って雨を聴き また 軒をかきそうだ。

それらの間を一人が歩いてゆく、その岩は  
眠りに急襲されたものの、まだ征服されてはいない。  
彼女は緋色の衣服を纏い、黄金の髪をし  
その依然として未だ接吻されたことのない口は一度は彼女を  
この世の鋭い消し難い悲しみの中に閉じ込めた。  
地獄の王侯は氷の炎をまとめて  
喘ぎながら 彼女の夢みざる雪を玉冠にしたいと願った；  
飽食した司教たちは歩哨を通りすぎ  
天上に降り、天国を求めてにゃーにゃー鳴いた。  
死者たちの間を歩いてゆく彼女は身体ごと音楽づいて

その口は二つの調べを一つ一つ用意した  
蜜のような別れに対して巣箱にとって置かれたものに基づいて、  
その喉は甘美な葦笛を吹いてそうなったもの；  
その胸は銀の堅琴を奏でられ 解き放たれた  
二羽の壮重な小さな歌をうたう鳥たちから 堅琴を奏でられた；手足の  
歌は互いに調子が合って結合されたので  
彼女が歩いてゆくと大気には音楽が充ちる；  
今や彼女は——彼女を抱擁せんとしてかつては公爵も王も  
緋色を纏う枢機卿も運命の絆を断ち切ったものだが  
ソファーからソファーへと休らぎなき眠りを求め  
嘆き悲しんで無関心に引き紐を撫でる。

都市化した死者たちは軒をかいて過ぎ しゅうと音を立てている海は  
再び頭上でとどろき 弓なすサンゴが  
口にされることのない色彩をどっと溢れさせて輝く魚を鞭打つ：  
サンゴの木々がその色彩豊かな葉から魚を剥ぎ取り、  
各々の葉には二匹の光の蝙蝠がとまり  
そこに眼がいつも留る、他の黄金の蝙蝠たちは  
間をすり抜けながら 曲っている脇腹を輝かせる。  
雷のようにとどろきながら岩々ががらがら崩れる；星の光の矢が  
それらの間で粉々になり砕ける。水の種馬が  
嘶きながら泡立つ湖の突進に波頭を立てる。  
人を呑み込む大波は空中へどっと突進しながら砕け散って  
上方へ柱となって星々をかすめて飛び  
ひっくり返った天空の中の弦の唸り声を聞き、  
それから飛び戻って岩々の間にそれらの波は失うのだ  
詠唱している星々の死にゆくざわめきを。

洞窟は音楽でうね立っている；糸なす音が  
黄金の蝙蝠のぶんぶん唸る翼の上でちかちか光り、  
草の根から日光に突き出していた木々の根へと  
輪を描いて飛ぶのだが そこでは鳥たちの歌が  
銀の糸をひねりながら 大枝から大枝へと輝く

牧き場の草は 彼の空想の足を冷やす：  
露が草の上であり 生け垣の鳥たちは  
鋭い光の縞で日光を織る。  
蜜蜂たちは林檎の花を砕き、桃とクローバーは  
南部の空気の中で歌う、そこでは目的定かならぬ雲が  
空の丘へと登ってゆき、羊のように葉を食い切る、  
それで鳩はびっくりして 風が起ち始めたように  
大気を銀の色の吸引音で充たす。

彼はその洞窟を去ってゆきそうだ、光の蝙蝠が  
飽きてそれぞれの軒へと戻ろうとする前に、  
そうこうするうち音楽は 風が帆をはらますように闇を充たし  
瘦せた灰色の足で歩く僧侶のように〈沈黙〉は  
更に己れの玉なす瞬間を語り続ける。  
その洞窟は闇でうね立ち、音楽が飛び交う、  
光の蝙蝠たちは突き出た端に戻り 再び暗くなる。  
彼の前を 傍の〈沈黙〉の僧侶と  
息づきささやいている尼僧の全てとが〈沈黙〉の  
自己と混ざり合ったように 彼は歩いてゆく、傍の扉は  
月に洗われた歩哨を立たせて  
その地衣に覆われた眠りを破る。ここで従者は立ち止る。  
その僧侶は 指の間で数珠を  
さらさら鳴らす。尼僧たちは定まらぬ時間の間隔を  
静かな息づきの絶望で充たす。

彼は門の方に戻ってくる。歩哨は手にもつ戈を  
静かにさり気なく持ち上げる。その一撫で  
眠っている門はそり返ってあくびをしながら目覚めるが  
そこには瘦せたオリオンが 膝を揺すりながら  
星々の間で弧を描く月を粉碎する。

## IV

そして

ラッセル街区の無菌状態の  
 霧囲気の中ですがすがしく浄められたものにしよう  
 ワイナムシーエイ（この目的のためだけのアメリカの急行でもある）を  
 瘦せている三月に春の乳房をなぶらせよう  
 気の進まぬカタツムリのような角を出して  
 ピンクの間隔の中で

兄弟が一人そこで

非常に 多くが する 非常に多くがする  
 時のうんざりする丁重さから

運命づけよう 婦人買物客がおつりをもらうように  
 明るく小銭で 非常に多くがする  
 石鹸で洗った簡易アパートに 英国の食べ物に同意する  
 あの料理人にさえ

ここには

トンネルがある長いのが黒い終止符のように  
 接吻で句読点を付ける 我々の左側に我々には見える  
 40本のポプラが少女たちの乳房のように  
 走ることで張りつめて

我々の左手に我々には見える

あの白晒れた台地が狡猪にも子宮に孕んでいて  
 彼の華々しい反撃をシーとって黙らせて  
 漠然としたたわごとにする 千  
 九百二十何年とか何とか

消滅して五年にでもなろうか

眠りの辛抱強い波の中に自然の  
 胃がくつろぐ その吸収している長靴の音を聞きながら  
 そのほかない汗は不快に蒸発している 落とす暇が  
 なかった糞<sup>糞</sup>を運びながら

将軍が自ら

今 旅をしている 合衆国のどこかを  
戦争について語りながら

そしてここで

大隊をなして横切る 活気のない行進をしながら  
ドイツ人が彼の首を燃やした（それは示すことになる  
神が彼をしかるべき怒りをもって訪れたということを）

おお、春よ

樹液を搾りとられていない丘々の丘顔の上に四月  
蜜蜂が喜びで戸惑いながら嘯っているおお春よ  
おお気まぐれに おお残酷に

おお激しく新しく 丁度火が

三月の曲がった飢えている手に  
君の白い深遠ならざる腿をむき出しにするように

草は 彼の足はもう何の故障もなく  
小路小路で青々として彼は

静かに眠る 腐敗が

死に到る 寝取られ男 そうだ 婦人  
八番街 我々は それの世話をする そうだ  
アミアンで 君は良いホテルが三つ見つかるだろう

## V

影立つ道々を強固にする日光の  
蓋なき炎を食い止める切符を  
振り回す縮んだ胸のニンフはいないし  
幽霊に憑きまとわれた沈黙は目覚めもしないし  
身動きもしない。

煙立つ雑木林では足どりは震えない  
そこでは明るい葉が 洩れ差す光で斑になった影へひらひら落ちる：  
この何もない林間の空き地を覆い包む綴れ織り



それはまた身震いして 動悸しているツグミを落ちつかせ  
且つ脅えさせる

その骨なき双掌に触れて  
遂に彼女は落下して夜の中へと解けこむが  
そこではインクのような影が光の上に跳ねかかる  
光が墓の一基一基の上を占める折り畳まれた闇に  
ぎっしり充ちている

その墓石は 鳩がそわそわと訪れて  
縫ってゆく薄暗闇に幽かにちかちか光る  
それは壁の間を泳いで教会の身廊へ続く部屋の  
人々の多くいる静けさを幽かにする  
思い出のようだ

教会の身廊では 光も薄い冷たい窓ガラスを貫いて  
床の上に落下する蝶に降り注いだりはしない:  
影は扉の内部にぎっしり充ちて  
枯れ葉が地上を過ぎる時に  
枯れ葉の中でささやく。

ここで日没が その旋回する黄金を彩るが  
胸も 喜びや悲しみの争いで  
鎮まりはしないし どの生命も  
鋭く冷たくなって音を立てないこれらの丘や谷間を  
燃え上がらせたりはしない。

## VI

人は来て、人は行く、そして背後に残すのだ  
肉欲を担っていた骨々を白く晒したまま;  
彼の数々の愛憎を乗せたその婦人用馬は

遂には土の中の馬小屋に入れられるのだ。

彼はそれを欺いた　それでそれは確かに運んだのだ  
彼を願望の窮極の縁にまで；  
だが今、願いが叶えられたので　彼には分るのだ  
自分を欺いたのはその馬だったのだと。

## VII

太陽のトランペットは　沈黙させようとして降下する  
家に家畜小屋に干し草の山に壁に。  
小屋の中ではゆっくりと旋回しながら  
ランプの明かりの黄金色が天井を動き回っている。  
風がなくてこわばった風見の下では  
飼畜牛が足踏みならし　飼料の穀物をもぐもぐ<sup>は</sup>食んでいる；  
星の降る林檎の大枝の下には  
歪んだ土くれの固まった鋤が寄りかかっている。  
月が昇ってくる、と　その間に　遙か彼方を  
悲しみで細っそりした牧羊犬の吠え声が  
その谿谷を淋しい音で充たす。  
ゆるやかに闇の薄片が　辺りに忍び込む。  
監視は夜警の〈死〉がし続けるであろう  
だから見逃してもらった人間は眠れるかも知れない。

世界は静かだ、それも彼女が年老いているからだし  
多くは　彼女が語った人生の数珠玉なのだから。  
そこで彼女は無駄話をしており、凝視している月は  
丘を流れを波を砂丘を見ており  
多くは　衰えてゆくのを彼女が見ていた美しいものである；  
それらは次々に過ぎ去ってゆくが  
恋人同士の誓いは彼女によって輝かせられ、  
浪浮者は彼女の明かりを呪っている；

彼女の柔和な光の中に 迷ったままだ  
消滅する肉体の全ての争いが。  
それから暗くなった部屋の内部に ささやきが話し声となって  
人間にはやってくるのだ 誰もが求めている眠りが。

潜んでいる盗人は厳しく後悔して  
遙かな世界を見つめている まだ目を覚ましたまま、  
だがそれも眠りのうちに まもなく静かになるだろう；  
が 彼は霧ごもる丘の上で  
暗い小鳥が短く叫ぶのを聞いている  
空にあるいつもの茂みからの叫びを  
そして月を呪うのだ 何故なら彼女の光は  
夜の裡に全ての浮浪者を目立たせてしまうから。

依然として殺人犯は揺れている、膝を折り曲げ  
いささか緊張したくつろぎのうちに、  
そよ風の美しい手を感じもせず：  
彼は今や ソロモンと共に全ての事を弁えている：  
結局は 息をしている間も彼にとっては  
困り果てながらも指呼の間を いらいら過すことに他ならないのだと。

### VIII

彼は褐色の大地を鋤で耕す、影を曳きずってゆく  
風の静かな大きな通り道を  
二重に気持よくして。彼の足の下で  
その畝は崩れ、そしてその端で

彼は振り向く。頭の辺りは平穏なまま  
彼はその土地を再び横切ってゆく：彼自身のものなのだ、  
まだ パンを得る見込みは途方もなく膨大であり  
力に充ちた清潔な匂いが吹きつけられるままに。

森のちらちらゆらめく紺碧に  
ムクドリモドキは涼しく甘やかにびゅっとさえずる；  
そしてそこに彼が肺を充たすための空間を  
求めて立った処に、疾走してくる黄色い

兎が急に飛び出してくる、そのきらめく短い尾は  
うねなす丘から溝へ 激しい恐れ  
でたらめな線を描いてしゃにむに入り込んできた。  
彼は叫ぶ： 暗い流麗な松の木々が

彼の下降してゆく声を鏡に映す、葉が  
澄んだ褐色の深みを持ち上げて その落下している自我を迎える；  
そこで再びムクドリモドキが現われる、  
磨かれた悪銭を盗む沈黙の盗人が。

あらゆる生活への答えが記入するのだ  
空の白紙のページに  
誰が通り過ぎてゆくかを彼が読もうとする  
争いの猛烈な無意味を。

大理石模様の空の下を 羊が行く  
ゆっくりと緑の丘の上の雲のように；  
どこかで 目覚めている水が眠るのだ  
ぐったりした葉の柳の蔽いの背後で。

風と太陽と大気： 彼には出来るのだ  
褐色の大地を鋤で耕すことが、自ら二重に  
汗をかいて、というも人はここで  
自らの両手両足で自分にパンを与えられるかも知れないので。

『ミシシッピー詩篇』のV（本紀要「文藝言語研究 文藝篇13」pp. 60~61）と大  
変類似した作品——訳者。

## IX

太陽が丘陵一带に長々と横たわると  
農夫はゆっくりと家路を辿り始める：  
牛は乳を搾られないままモーモーと鳴き  
その辿りゆく先へは青々とした草が靡く。

マネシツグミは大古の榎の木で  
黄金の狂気に駆られてふらふら揺れわなわな震える；  
羊は緑の丘々の切り岸に碎ける  
寄せ波のように ゆるやかに流れ動いて散ってゆく。

太陽が沈んでしまうと、それと共に  
ようやく剣を鞘に納めた  
野外劇は いにしえの戦士のように  
物語に彩られたそれぞれの武具を降して呼吸するのだ

この空気を、そしてこの平穩を見出すのだ あたかも  
この日没を横切って安らぎにゆく人が  
湿り気のない匂いと音を見出すように；  
そしてこれこそ全て、これが何より。

## X

丘の彼方を太陽は泳ぎ下って  
紺碧の海に抱き込まれてしまった；  
彼を傷つけた夢、彼を鞭打って土に  
這わせた血も 速度がゆるんで 彼の痛みも楽になった。

彼の後には一日が横たわっていた パンのために  
大地と奮闘する彼の労働でこわばって；

彼の前には眠りが、明日があり、彼は頭の周りに  
不吉な影の円を描いていた。

だが今や 夜と共に これは忘れられてしまった：  
人間の周りに息づく幻影は素早く泳いでゆく；  
その父である〈死〉を忘れて； その母である  
〈あざけり〉は遂には彼女に忘れられて。

ニンフやフェウヌスなら この薄明の中で大騒ぎをしそうだ  
大洋となって広がる〈時〉の冷たい緑がかつた柵の全てを越えて  
金切り声を立てる葦笛に合わせ、シンパルの擦音に合わせて  
孤り氷の冷たさで輝く星の下で

そこで彼は 強迫感に駆られる  
——壺の上のものすごい姿はどうだ——  
地平線と水平線との間に捉えられて  
戻れないことも忘れて。

## XI

夕べの影が辺りに展がり  
淡い月が小道に充ち  
二人のゆるやかな息づきが幽かな音を立てていた  
リチャードがジェインと横たわっている処で。

世界は二人以外は全く何もなく  
春そのものが毘にかかっていた、  
それにどの日の運命もよかった  
これ以上悪くはならなかったのだから：

若い胸は火でうつろにされた、  
木と大風が一体となるまで

彼の欲望の風吹きすさぶ木を  
回転させる歌うたう火で；

すると小さな白い腹部は実りを生じた  
それで彼らは作ろうとするのかも知れない  
若さと闇と春とから  
駄目にもならず弱まることもあり得ない杯を。

## XII

若いリチャードは 町へすたすた歩いてゆきながら  
己れの内部で生命が 銀の針金のように  
びんと張っているのを感じていた、そこには  
欲望の鋭い風が吹きつけられていて

怪物めいた音を立てて、しっかり彼を抱き込んでいた  
土と火の雨で、  
生きている針金の鞭で  
彼を激烈に皮剥きながら。

メアリーの住む弓形門の下を  
短くて身を切る寒さの夜々  
彼女の古めかしい音楽は彼のと出逢った  
キュテラが豎琴と出逢うように

そしてリチャードの火は 彼女の火の中にあつたが  
渦巻いて空中に舞い上り、  
呼吸はすっかり偏向されたのだ  
一人の少女が髪を下げた時。

## XIII

私が若くて誇り高く陽気で  
野にも花々がびっしり咲いていた時、  
タッドがラルフがレイがいて  
皆が私の花摘みを待っていた。

そして誰が、そのような読みとくページがあり  
それを展げる春の手があるのに  
それを読んだ別人によってのように  
巧みに語られた物語が 好きになれるだろうか？

ああ、私はそうはならない！ としてもし私が  
——私は若くて美しかったのだから——  
読みとくに到れなかった時は タッドと  
ラルフとレイが来て 憐れんでくれた。

タッドとレイとラルフがいて  
野や小道には太陽が照っていた；  
ああ！私は一人で私のページを読みといた  
ジョニーと結婚するずっと前に。

## XIV

彼の母親は言った： 私 この子を 未だ  
かつて現われたことのない若者にするわ  
（そして懇ろに揺すった、彼の柔らかい  
髪の金色のつやを撫でながら）  
彼の輝かしい青春は 未だ  
どの錬金術士も見たことのない金属になることだろう。



彼の母親は言った： 私 この子に  
輝く激しい欲望を与えるわ  
生活の浮き滓が全て  
この子の火の中できれいに燃えてしまうまでに。  
彼は強く陽気になり  
また 彼は高潔に勇敢になるだろう、  
だから 世はあげて残念に思うことだろう  
彼が墓場で闇となれば。

だが 闇の方が彼に親切に  
してくれるだろう どこの誰よりも  
(不毛の風に彼を揺すらせ  
——尤も今や 彼にはどうでもいいのだが——  
そして音なき高慢な星の光に  
彼の金髪を撫でさせるのだから)

人類は彼を重罪犯人と呼び  
彼を高々と吊し首にして硬直させた  
そこは四方から風が 彼を見詰めることができた  
空で困惑しているのを。

一たびは彼は 抜け目なく黄金に輝いていた、  
一たびは彼は 清浄で勇氣に充ちていた。  
大地よ、君は彼を夢みて作り上げたのだ：  
君は彼に墓を拒むのか？

死んだので彼は 君を許すであろう  
君の行なったこと全てをも、  
だが彼は君を呪うだろう もしも彼が  
太陽ににやにや笑っているのをそのままに放置するなら。

〔この作品は最初の三連が、『ミシシッピー詩篇』の中の「極悪人」“The Gallows”  
(本紀要「文藝言語研究 文藝篇 13」\* 1987, pp. 65-66)と殆ど全く——第1連の2

行目が、A lad as ne'er has been → A lad has never been（本稿の方）になっているだけの違い——同一である——訳者。\* これは以下、前掲号と記す。

## XV

気持のよい大地に気持のよい大空  
そして気持のよいのは 林檎の木々に  
雨と太陽がさあーと降り注ぐこと  
私がまだ眠っている間に。

そして気持のよい大地と気持のよい大空  
そして気持がよいだらう 雨は  
太陽は 林檎の木々の間のは  
私が再び長く眠り込んでしまった時も。

## XVI

「私を見たまえ、羽根飾り付きの帽子をかぶりタブレットを着こんで、  
人々が生活と呼ぶこの舞台を気取って歩いているのを：  
あらゆる若さと希望と奮起の鏡だ。  
君でさえも 私の中ではしかめっつらになるだろう。」

「そうだ、そう信ずるのは 君もまた死ぬべき運命のものにすぎないのだ、  
平和と静穏と沈黙とは  
君を囲む呼吸の壁に映った  
君のわずかな仕草の影にすぎないと考えているのだ。」

「ほう、なつかしい亡霊よ、慧智の肋骨で厳かに補強されて！  
君は思うのか 私が君の暗い強制を感じて  
びゅーびゅー鳴る闇の中を 王や王女たちと逃げなければならないのだと。  
私は星であり、太陽であり、月であり、笑いである。」

「どんな星があるのだろうか、誰にも目撃されずに落下するなんて。  
 どんな太陽があるのだろうか、闇よりも永遠なんて。  
 どんな月があるのだろうか、はじけないなんて。そうだ どんな笑いが  
 どんな財布が あるのだろうか、使っても空にならないなんて。」

「ほう……人は疲れてしまう、気取ってにやにや笑って  
 人々の住んだ影のある家への夢を猿まねして！  
 そうだ 君だったのだ 私を裸に剥いで私に  
 鏡の中の自分自身の顔に分けの分らぬことを早口でしゃべらせたのは。」

「その通り、それは私です、世界の澄んだ夕べに  
 銀の星が漆器の深鉢の中の葡萄のようで  
 君が自分の役を演じ終って遂に静かになると  
 眠りながら君を待つのは、それで君は溺れるがよい。」

## XVII

おお アテュスよ  
 一瞬間 無窮 私は立ち止り飛び込んでゆく  
 汝の胸の狭い絶壁の上を

汝の白い絶壁の前を 鷲が  
 日光の中にくっきりと現われ 切り裂いてゆく  
 彼の長い青い法棍を かと思うと  
 風は朝の翼で薄とび色となった丘の頂に  
 かと思うと風はおおアテュスよ 四月をさっと一刷けはいてレスボス島へ  
 海を白くしながら

[アテュス：ギリシャ神話、Cybele に愛された Phrygia の少年]——訳者

## XVIII

かつてとある青年期の丘に  
一人の若者が横たわっていて 空気で刻まれた積雲の  
積み重ねられた銀色の形姿の中を見詰めていた  
切り裂いて突き進んだりはしない一羽の孤独な鷺を、そして  
欲望を溶解する静穏で晴朗な青空を。

地球の安楽な谷々が存在していた： 彼は振り向きも  
下を見ることもなく、春の平和な  
草青き小道も、緑の  
引くことなき風なき木々の潮も、見てはいなかった；ランプの灯に照らされた  
壁の旋回する黄金色も、そこには速度は全くなかった  
寝床と夕食との間の平和な語らいが作り出したもの以外は。

ここには依然として青空が岬が； ここには依然として彼がいて  
目覚めてもいず 目を覚まされてもいなかった。  
鷺は孤独な行路を高く急速飛翔していた；  
消え去ってしまった。だがそれでも 孤り丘の上でその若者は  
変りゆく岬を過ぎて翼をあおっていたのだ そこには  
変らぬ青海がたわむれて

そして空の疾走する深い峡谷が  
パンシー金網と傾斜した半切妻の方へ傾くのを見ていた、  
更に 飛び去ってゆく壁面の上の己れ自身の孤独な姿をも、  
その壁には太陽の絶えざる雷鳴が 堅琴の音を奏でていた。

[パンシー：アイルランド民話などに登場する女妖精。死者の出ることを予告して  
姿を現わしたり、特に窓辺で泣きわめいて知らせる]——訳者。

## XIX

緑色なのは水、緑だ  
 太陽の奏でる壮重ななまめかしい音楽は；  
 女王の蒼白い骨のない四指が  
 彼の身体の上で飛びかかって走るのだ。

日光の肋骨が溺れる  
 これらゆるやかな大寺院風の回廊の中で  
 彼は赤や褐色の海の精たちとの  
 緑色の抱擁合戦に参加して

その一人を選んで床入りし  
 抱かれて寝かしつけられるのだ 彼は、  
 海の中を 鎮魂曲へと  
 おぼろに溶解してゆく太陽の音楽によって。

## XX

ここに彼は立っている、永遠の夕べが降りてくる間  
 灰色の壁の間をゆっくり降りてくる  
 夢のようだ、ゆっくり降りてくる  
 灰色の上端の欠けた石の二つの壁の間を  
 沈黙に蔽われてゆく二つの壁の間を。  
 薄明は水面で断たれながら常に降り続け  
 決して死ぬことのない芽吹いている花々でどっしりと  
 そして絶えず叫び続ける声は  
 甘やかに 穏やかに。

春が冷たい街路の壁を目覚めさせ、  
 凍った処々に贈物の金色の種子を撒く：

静かに純粋に微笑んでいる顔々のような牧き場に、  
しわ立った流れ流れに、そして彼女の足を知らなかった草に。

ここに彼は立っている、石の門がないまま  
沈黙に覆われてゆく二つの壁の間に、  
床に沈黙の葉がちらばっている処を；  
ここに荒廃した泉の壮嚴な銀色の中に  
滑めらかな緑の芽の間に、扉の前に  
彼は立って歌うのだ。

## XXI

何たる悲しみか、騎士にして紳士とは？ 巻物と  
豎琴がぐらつく空を支えるだろう  
ローランの青銅の固さの名声で、  
彼は青銅ではなく 従って死んだけれども。

そして麗しい貴婦人方 何故涙を流す？何故ため息をつく？  
あなた方の鋭い突き棒を感じ取る  
戦士たちが まだ沢山いるのだ  
ローランが愛と戦いでそうだったように。

だから陽気であれ、汝雄々しい敵兵諸君。  
婦人が諸君を生んだのだ： 激烈に  
人生の強風は吹くかも知れないが、婦人から生まれるのだ  
諸君に再び眠りを与えるものは。

ローランのために泣くなかれ： 羨むことにしよう  
その名声は歌と物語の中でぐらつかないのだから、  
彼は無数の天使ケルビムたちに  
安らかに抱擁され 栄光の裡に眠っているのだから。

## XXII

私はあなたの顔を わが心の薄明を透かして見ている、  
忘れられた物事、思い返される物事の薄暗がりを：  
それは暗くて音楽で冷たい回廊で  
おぼろに霞んで見えないが、  
私を扉へと導いてくれる、そこから  
あなたが 私を喜ばせてくれる静かな音をまとめて現われるのだが。

## XXIII

どこかで月は花開くのに 私を見つけてはくれない、  
それから青空の風なき庭々が衰える；  
どこかで生まれた縁が傷ついて (だが この方がまだ  
長く忘れられた豊かな荒廃の中にいるよりも)  
とこかでは甘美に思い出された口が接吻せんものと——  
だが、君 愚か者よ、じっとしていたまえ：君はお呼びではないのだ。

## XXIV

どうして汝は純潔であり得ないのか、孤独な夜につぐ  
夜、私が親密に愛想よく  
帯を緩めて 汝の厳肅な美の傍に横になっているのに； また悲しみも  
私自身のはとくに去っているのに、また 私の身体を  
天翔けさせて横たえんとする蒼窮のような平和もあったのに  
そこでは汝の名前は無音の銀の鈴のように  
私の上に息づいていながら 余り喜びは見出していなかったが  
汝が騒ぎ立てていたのは悲しみよりも目覚めの方だったのだ  
だから私はただ 汝を頼ることが必要だった、そこで  
私の手は汝の小さな胸の上で夢みていたのだ。すると流れてきたのだ

私の手の下を汝の肉体の曲線が、そして向かったきた  
 孤独に 飢えていた闇の中を 私の方へ  
 汝の眠りを促す接吻が。

## XXV

これは夢だったのか？

こんなのだ： 私は横たわっていたみたいだ  
 浜辺に、そこでは砂と水とが口づけを交わしていた  
 終りゆく秋に いつ果てるともなき口づけを。月が  
 水の中を歩いていた。銀の靴で踏んでいた  
 震え声を出している砂浜を： これ以外は何もなかった。

そしてそれから間もなく おお 間もなく  
 どういう風が

汝をクニドスで形作ったのか。  
 汝の彫刻された音楽を。何処からそういう見せかけを  
 星の光は取ってくるのか しかも取られたことのない美ではなくて  
 それ程渴望されている手を。

おお 私は見たのだ  
 窮極の鷹が 窮極の窓から支柱を取り除くのを  
 それも彼の降下の湾曲してゆく影像が  
 嘴と嘴とをしっかりと組み合わせて。そして目が覚めた

そして目が覚めた。それから月  
 と震え声を出している砂浜、そこでは接吻が這って消えていった  
 そしてそれが全てだった。

(それとも私は眠っていて  
 そこがごたごたと集りながら衰退してゆく時泣いていたのだろうか？  
 再び眠りに陥る前に長く目覚めながら)

[クニドス：小アジア南西部 Caria の古都。アテネ海軍がスパルタ海軍を破った所。



394 BC]——訳者。

## XXVI

静かに そして下を見よう、下を見よう：  
 汝の奇妙に引っこめられる手は  
 探りを入れず、今や 精神と感覚は混合されず、溺れもせず、  
 言葉で織られ、時制で切り離されていた  
 このように：〈である〉：〈だった〉：及び〈なかった〉。使い尽くされた  
 落と 焼きなまされた飽くことなき海との間に捉われて無数のものが  
 冷たい処女のセレーネも 横たわるようなことはなかった、  
 隠れた浜や なじみの災難をもたらす風下には、  
 感覚の薄れゆく北西風の背後であったが。

[セレーネ：ギリシャ神話、月の女神、Hyperion と Theia との娘、Endymion に  
 愛された]——訳者。

## XXVII

寒々としたワタリガラスとフィロメルは  
 血を流している木々の間に住みついていた。  
 彼のしわがれた叫びと彼女の声とは混じり合い  
 闇の中を彼らの糞は落ちていった

赤くぱっと咲き出した薔薇の上に、  
 桃の折れた枝の上に、  
 桃は香水をつけた口で汚されていた  
 互いに歌っては閉ざす口で。

時と流れと愛と死の  
 情熱溢れるあらゆる聖歌隊指導者の間で

フィロメルは宝石で飾られた息づきで  
逃亡を夢みるが 身じろぎもしない。

薔薇と桃の上に 彼らの糞は血を流した；  
愛を犠牲は押えたのだ、  
彼の手の下で 彼の口は殺された、  
彼の手の下で 彼の口は死んだ。

そこでワタリガラスは 時の  
ゆるやかな絶望と寒々と調和しながら  
自分の周りのフィロメルに歌を歌わせて  
彼女の合唱する声を消費させる。

フィロメルは 苦痛の赤い根の上で  
照り映えながら歌を歌った、それで苦痛はなくなった；  
彼女が歌を歌って忘れられると  
ワタリガラスが話し出す、もはや啞ではなくなって。

寒々としたワタリガラスとフィロメルは  
血を流している木々の間に住みついていた。  
彼のしわがれた叫びと彼女の声とは混じり合い、  
薔薇と桃の上に 彼らの糞が落ちた。

## XXVIII

『『ミシシッピー詩篇』所収のⅣ「雁」“Wild Geese”と殆ど同一の詩（本紀要前掲号 pp. 59-60）。stir → wake, This → The, Thine → Then, in this dust → this dust, と若干語句に変更がある]——訳者。

## XXIX

『『ミシシッピー詩篇』所収の「懐妊」“Pregnancy”と殆ど同一の詩（本紀要前掲号 p. 60）。diffidence → difference の違いがある]——訳者。

## XXX

『『ミシシッピー詩篇』所収の「十一月十一日」“November 11th”と語句の上では全く同一の詩（本紀要前掲号，pp. 64-65）。小文字が大文字になっていたり、ハイフンの有無の違いだけ——訳者。

## XXXI

彼はそれを銃剣であおぎ分けて  
銃でそれを植えた、  
それで今や とどろく砲声も  
雨と太陽とで癒されている

彼は見回す——そして飛び上って踏みにじる  
あの頑固ににやにや笑っている種子を  
彼の色彩豊かな雑草の畠の  
下にずっと以前に植えた種子を。

## XXXII

ごらん，シンシア，  
アベラールが時の肩を  
蒸発させるさまを，そしてバリが  
彼の苦い親指を味うさまを——

蛆虫が肥えて，内臓がとび出している  
が 愛してではない，おお シンシア。

## XXXIII

『『ヘレン・求愛』の XV のソネット（本紀要前掲号 pp 56-57）の 5～8 行の 4 行

がそっくり抜けた10行詩。その他に Knew I → Did I know, young → grave, this → a, stalk → tree, yet → still, wild → sad の語の変更がある]——訳者。

## XXXIV

夜の船は薄明色の帆を張って  
西の黄金川を夢みるように下っていった、  
そしてイエスの母は疾風に思いを凝らした  
イエスの口が彼女の胸に投げ出されて飲んでいる間に。

彼女の 柔和なスリッパ履きでくつろいだ鳩の目は 薄暗がりの中をさまよい  
暮れてしまうと彼方へクリーム状となり  
高慢な星が黄色い麝香を無効にした  
そこでは死んだ王たちが 長い寒い年月を眠って遠去けてしまう。

潜められた声々は 天の階段上を  
上へ昇ってゆきながら 各々まどろんでいる王を目覚めさせる；  
夜明けは彼女の胸を膨らませるミルクであり、彼女は七つの  
悲しみのせいで聖歌合唱の鐘を栄冠に戴く；  
星が若いイエスの眼をまだらにするために与えられ  
白い風が 薄明を一杯孕んだ帆の中で歌をうたう。

## XXXV

『『ミシシッピー詩篇』のⅢ「小春日和」“Indian Summer”と殆ど同じ詩（本紀要前掲号 p. 59）。toward → of, Thus → So, too, clean → lean の変更がある]——訳者。

## XXXVI

風の吹きすさぶ木々は、空虚に 緑の

内臓を抜かれた空に寄りかかり、種馬〈風〉は  
太陽の黄金の襟を踏みつけて 体重を  
もたせかける。そして一度は躓立った目を背後にして  
その黄金の駿馬は 自ら押し通ってゆく野で草を食<sup>は</sup>み  
これまでいた処で多くの歯をびかびか光らせながら  
木々は、待っている雌馬が彼の嘶きを震わせている時、  
彼の盛り上がる姿を 一瞬間間見せるのだ。

丘陵の上では 星々を激突させながら  
ニワウルシからその光輝を剥ぎ取りながら  
馬屋に住まわされ黄金の天候を穀物飼料として豊富に与えられながら——

彼が引き裂き強奪した木々の裡に  
もぎ取られた大枝によって激しく抱擁されながら  
そうしているうちにも 藪だらけの丘陵で 彼は足踏み鳴らして嘶く。

### XXXVII

競争の光輝が 彼女の口唇<sup>くちびる</sup>を持ち上げ、晒すのだ  
緋色の微笑のうちに その小さな歯を；  
年月は風がたわむれる砂である；下にあるのは  
彼女の死を知らぬ薔薇の監禁された音楽。

霜に打たれた岩の中に 彼女は住みついてガラスで囲まれている；  
今や人は彼女を 恐れることなく見詰めることができよう。  
だが 彼女の軽蔑に充ちた眼は 彼を背後まで凝視し  
彼が通り過ぎる時 彼のぼんやりした羊の毛を刈る。

リリースである彼女は 死んで安全に埋葬された  
それで人間は何ら騒ぎを引き起さずに 植えて剪定できそうだ  
そうなるものと運命づけられていた相続した古からの土地に、  
狼が沈黙している時 羊の群が静かに草を食むように——

そうだ リリスである彼女は死んで、彼女は孕み、  
彼の葡萄を切りほどいて ゆっくりその果実を食べる。

〔リリス：セム族伝説——荒野に住み子供を襲う魔女。ユダヤ伝説——イヴの創られる以前のアダムの最初の妻、魔物の母〕——訳者。

### XXXVIII

汝の疲れた全てのものの中でも 最も疲れ果てたようにみえる口唇よ、  
しかもそれは 汝の秘密の顔のねじ曲った蒼ざめたひそかな  
静かな謎のゆえに一層疲れの度が見え、汝の  
病める独自の絶望にひどく取り憑かれている口唇よ；  
手を心臓に当てるな、抗議もするな  
微笑みは汝の疲れた口を和解させるのだなどと、  
というも 罵りは汝をただ悪辣に欺いてしまうのだから  
彼自身の横腹と胸のひそかな喜びで。

口を微笑みで疲れさせて：汝は汝と  
結婚できないのか、それとも 汝自身の接吻を満足させられるのか？  
汝の腹部の目覚めは 睡眠の厳しい不在で  
自らを嘲けるのだ 余りにも目覚めてしまって；  
そして汝の口の近くに 汝の対になった心の苦しみは隠れるのだ  
間に胸がないのだから： それは破れない。

### XXXIX

〔『ヘレン・求愛』所収の VIII 「純潔」“Virginity”と殆ど同じ詩（本紀要前掲号 pp. 52-53）。dark → bud, yet → though, but → and, buys → does buy, bright traffick-  
ing → trafficking の変更がある〕——訳者。

## XL

淑女よ、気づかれぬまま尚も眠りの花嫁である人よ、  
 汝自身にとって甘美な囚人で且つ  
 汝の柔らかい無防備の胸なる白い要塞を  
 保持するしもべとなった駐屯軍の恐い<sup>とりこ</sup>虜よ；

ああ、しばしば欺かれる処女よ、彼女は二人になってはいないが  
 自己混乱しており、しつこくせがみ寄って  
 敵を撃退する反面、単独では依然として  
 しばしば神々と運命の三女神の寵児であり続ける。

汝は純潔なのか？ 全くのところ 私は幾夜も一人きりで横たわってきた  
 夜は何しろ 汝がやってきて私の花嫁になってくれるより速く逃げ去るのだから  
 私は汝を 汝の寢床の織物と看做してきたのだ  
 その寢床では 汝の枕の頬で転々としながら汝の接吻が  
 汝の要塞の中で敵を捉えたのだ  
 その口を汝の口は挽ねつけて眠り続けるのだから——こんな風に。

## XLI

『ヘレン・求愛』所収の IV と全く同じ詩（本紀要前掲号 pp. 49-50）——訳者。

## XLII

『ヘレン・求愛』所収の II と殆ど同じ詩（本紀要前掲号 pp. 48-49）。Expiating  
 → Regretting, commit → omit, new → old, feeds and fans → ever feeds の変更が  
 ある]——訳者。

## XLIII

『ヘレン・求愛』の「結婚の申し込み」“Proposal”と殆ど同じ詩（本紀要前掲号 pp. 50-51）。第1連の3行目に若干の異同がある——訳者。

## XLIV

悲嘆があるなら それは単なる雨にしておもう、  
 そうすれば これは単なる悲嘆のための悲嘆にすぎなくなる、  
 もしこれら緑の森が ここで夢みながら私の心の中で  
 目覚めようとしているなら、もし私が再び目覚めるなら。

だが私は眠るだろう、というのもそこには とにかく死があるから  
 これら青い丘陵では 頭上は眠気を催しても  
 私は木のように根づいているのだろうか？ 私は死んでも、  
 私をしっかり抱いてくれているこの大地は私に呼吸を見つけてくれるだろう。

了

〔付記〕 以上は、William Faulkner, *The Marble Faun and A Green Bough* (New York: Random House, 1965) に基づいて、フォークナーのこの二冊の詩集の全訳を試みたものである。後者の44篇の詩のうち6篇は、既に拙訳を試みたフォークナーの詩集『ヘレン・求愛』及び『ミシシッピー詩篇』の中のものと同様、もう1篇には部分的な重複がみられる。拙文「William Faulkner の詩」（筑波大学文芸言語学系紀要「文藝言語研究 文藝篇13」pp. 47-69）を参照されたい。本稿の二作品を含めてフォークナーの詩全体については稿を改めて論じたい。なお、『大理石の牧神』には、フォークナーの才能を逸早く見出し終生彼を励まし続けた年長の親友 Phil Stone が序文を寄せているので、以下にそれを全訳して紹介しておこう。

## 序

これらは主として、青年の、純真な心から成る詩篇である。日光、木々、空、青い丘陵に直かに反応し、逃避することなく人前を気にせず反応する心の詩である。これら詩群は書かれた土地、その作者を生育させた土地がそうであるように、日光と色彩



の中に浸っている。作者は、樹木同様、確かにどうしようもなくこの土壌の中に根を持っているのだ。

これらは青年の詩だ。或る年令の時期でないとういう詩は書けないものだ。これらはどうしても、あの、不安定と幻想の時期のものだ。冷たい春の草同様に若々しい。

これらにはまた、青年特有の欠陥もある——青年の気の逸り、洗練不足と未熟が。これらには、太陽の中に生きているということだけで感じる青年の喜びと、全く何でもないことに突然、漠然と理由もなく覚える青年の悲しみとが同居している。

処女作には、将来性があるという以上に確かなことは、めったに言えないものだ。それで私は、これらは将来性を示していると思う。何しろ言葉と言葉の音楽に対する並はずれた感受性や、柔らかい母音への愛、色彩と韻律に対する直観があり、そして時には、小手先と眼が将来逞しくなることを暗示しているのだから。

これらの詩の作者は、故郷の土に浸りきった男であり、根っからの南部人であるが、それにもまして、ミシシッピー人なのだ。普遍的な芸術は全てまぎ地域性を持つことで偉大になる、とジョージ・ムーアが述べたが、北部ミシシッピーの日光とマネジングダムと青い丘陵が、この青年の存在そのものの一部になっている。

彼はさまざまな戸外の経験を積んだ人であり、広範な読書をし、軽快なユーモアと南部人風の機敏さ、柔軟な想像力の持ち主であり、詩人たちとその技術上の試みと業績の数々に精通し、就中、頑固なまでに自己に正直である。本書が他の詩人たちの痕跡を留めているのは避け難い。恐らく、博識の方々は皆、既に、詩人というものはヨブの額から一人前になって飛び出したりはしないことを御存知だろう。詩人は生来の衝動を備えて生まれなければならないのは確かだが、他の詩人たちを見習うことで自己の職業を覚えるのである。弁護士、大工、レンガ積み工がそうであるように。見習いの痕跡が処女作に現われるのはやむを得ないが、本物の才能を持つ人は生長してそういうものは背後に残し、遂には自分の庭以外では咲くことの叶わない花を生み出すものだ。必要なのはただ——もし独創的才能を恵まれていれば——仕事をするだけであり、不屈の正直を示すことだけなのだ。

丘陵を長いこと一緒に歩きながら私は述べたことがある。エイミー・ロウエルと彼女の宣伝者たちの主な難点は、彼らの止むことなきとんでもない自意識であり、彼らは常に片目でボールを追い、もう一方の目で正面観覧席を見すえるのだ、と。それに対してこれらの詩の作者は応えたものだ。詩人としての自分の個人的な難点は、片目でボールを追い、もう一方の目でベープ・ルースを見ていることだと。確かに、これ程鋭くユーモアに富んだ正直な精神には、さまざまな可能性が内在しているに相違ない。

フィル・ストーン

ミシシッピー州 オックスフォード

1924年9月23日